

奈良盆地にみる祭祀空間

—奈良盆地を中心に—

上野 誠*

文学部国文学科

本研究においては、旋頭歌の形成過程を取り上げることとした。

旋頭歌は柿本人麻呂によってくふうされた歌体であることについては、早くに武田祐吉の指摘があり、本研究もこの仮説を検証するかたちで進めることとなった。

上記の仮説に立って万葉集を精査すると、面白い事実に出くわす。それは、旋頭歌体が人麻呂の若き日において、人麻呂自らによって生成された歌体であるという事実である。対して、さらに万葉集を精査すると、次のような事実も見出せる。万葉歌に登場する穴師と巻向関係の地名が、この人麻呂の若き日の歌にしか登場しないという事実である。ちなみに、穴師と巻向については諸説があるが、現在の天理市内に比定できる。

つまり、人麻呂の若き日の活動基盤の一つが当該の地域にあったということである。とすれば、その地域での作歌活動のなかで生成された歌体こそ、旋頭歌ということになる。

さて、この旋頭歌については、古く折口信夫が神との「問答」を中心とする神事歌謡から出た歌体である、という仮説を発表している。当該の地域は、古代において山人の往来する地域として有名であった。そして、なによりも重要なことは、当該地域が古代の大和王権の発生と深く関わる地域であったという事実である。とすれば、大和王権の基盤となる地域において、7世紀の後半に人麻呂が独自に生成した歌体が旋頭歌であるということができる。

神に扮して蔓をつけて山から里に下りてくる山人、その山人と問答する祭祀がこの地域で行われていたことは旋頭歌を考える上で重要であろう。さらには、こういった神観念の形成が、奈良盆地生活者の空間概念と密接に関わっていることも、指摘することができる。つまり、山辺の道に山人がやってくるからである。

以上の予備的考察をもとに、本研究では旋頭歌の「問答体旋頭歌」の研究を具体的に進めることにした。なぜならば、ここまでの考察は、発生論的な仮説に過ぎず、表現からの具体的研究ではないからである。

さて、その研究にあたって考察の対象としたのは、以下の点である。

- A 旋頭歌体の成立における問答形式の存在の意味
- B 人麻呂歌集旋頭歌における問答形式の存在の意味
- C 人麻呂歌集旋頭歌の享受の場の推定

A B Cの三点を考究するために具体的に取り上げたのは、「住吉 小田莉為子 賤鴨無奴雖
在 妹御為 私田刈」(巻7の1275)である。当該歌において注目したのは、

- (ア) 当該歌に使用されている言葉の特質はどこにあるか
- (イ) さらに、その笑いを享受した人びとは、どのような人びとか
- (ウ) 以上の点を踏まえて、当該歌の笑いの質をどのように考えるべきか

という点である。(ア)(イ)(ウ)の三点を踏まえて研究を行い、下記の研究発表を行った。ただ、その結論については論文に譲りたい、と思う。

上野誠「妹がみためと私田刈る(巻7の1275) - 旋頭歌の笑い -」(美夫君志会全国大会
2001年6月30日、中京大学)

本発表は、口頭発表後に開催された理事会において審査を受け、理事会推薦による雑誌論文執筆の依頼を受けることが出来た。その依頼状に基づいて下記の論文を成稿した。下記の論考では、問答形式と呼ばれる当該歌がどのような質を持った文芸であるのかということ、(ア)(イ)(ウ)の解明を通して、説明したつもりである。なお、美夫君志会は、日本を代表する古代文学の研究団体で、日本学術会議登録団体である(本部・中京大学、代表理事・村瀬憲夫近畿大学教授)。

[単著]

論文名：妹がみためと私田刈る(巻7の1275) - 旋頭歌の笑い -
論文掲載誌：『美夫君志』第63号所収
出版年：2001年11月30日発行
頁：15頁～31頁
種別：学術雑誌所収論文